

「神の慈しみによって互いに赦し合う」

ジュアン司祭

みなさま kami ittsu ta ga yuru a ha na o mo mi na
皆様、「神の慈しみによって互いに赦し合う」について話したいと思います。まず、皆さんはヨハネ・パウロ 2世とメフメト・アリ。アジャさんをご存知でしょうか？私 が「互いに赦し合う」という事を話すときは、この二人の体験はとても大切だと思います。

o ho ka ta ne n ga tsu ni chi sei
覚えている方もおられるかもしれませんが、1981年5月13日、ヨハネ・パウロ 2世はバチカンのサン・ピエトロ広場で、トルコ人のマフィア メフメト・アリ。アジャという人から銃撃されました。銃弾は2発命中し、教皇は重傷を負いましたが、奇跡的に内臓の損傷を免れ、一命を取り留めました。アジャは逮捕され終身刑が宣告されました。

ne n ka go kyoukou so ge ki ha ni n shu u ka n ke i mu sho o to zu
1983年のクリスマスの2日後、教皇は狙撃犯人のアジャが収監されている刑務所を訪れました。

fu ta ri me n kai ta n ji ka n kai wa kyoukou wa ta shi ha na ka re wa ta shi ai da hi mi tsu
2人は面会し、短時間の会話をしました。教皇は「私たちが話したものは、彼と私の間の秘密のままでなければなりません。私は彼を許し、完全に信頼できる兄弟として話しました」と語りました。2005年4月にヨハネ・パウロ 2世の訃報を聞いたアジャは、

fu ka ka na o ho mo fu ku ka zo ku tsu ta
深い悲しみを覚え、喪に服したことが家族により伝えられています。

wa ta shi ka re yuru ka n ze n shi n rai kyou dai ha na sa ma ko to ba ki
「私は彼を許し、完全に信頼できる兄弟として話しました」というパパ様の言葉を聞いて、どうしてパパ様はあんなひどいことしたアジャを許すことが出来たのでしょうか？

ta ga yuru a ko to ni n ge n ka n ke i mo to jyu uyou o mo sa ma yuru
「互いに赦し合う」という事は人間関係において、最も重要なことだと思います。イエス様は赦しについて、ご自分の教えの中でも強調していました。弟子たちに祈りを教えた時に、「互いに赦し合う」という部分も入れられたのです。「わたしたちの罪をお赦しください。わたしたちも人を赦します。(マタイ福音書6:12)」と。そして、最も素晴らしい模範を示して下さったのは、十字架上で、自分を殺そうとする人々のために、赦しを与えて下さった事です。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。(ルカ福音書23:34)」と。

yuru ta n i ma mi to ai ite kou dou mi to i mi
「赦す」ということは、単に、今まで認められなかった相手の行動を認めるようになるという意味でも、人を傷つけるような行為を認めるという意味でもありません。むしろ、自分の心の中にある赦せないという、否定的な考え方の視点を変えるということが大切なのです。イエス様が示して下さった十字架上で、人々を赦された模範と同じことです。つまり、「その兵士たちの行為を認める」という意味ではなく、むしろ、相手の魂を磨くため、また、命を救うために、プラスのエネルギーを与えなければならないという事が、赦しの目的なのです。さらに、「赦す」ということは、相手のためだけではなく、自分のためにも、プラスのエネルギーを集めることによって、自分の心や魂も癒されると思います。その反対に、悪いことを考えたり、言ったり、したりすると、どんどんマイナスのエネルギーが集まるでしょう。ですので、相手を憎んでいると、自分の周りには、負のエネルギーがまと

わりつき、魂^{たましい}はザラザラになります。そして、悪いことを引き寄せるのです。

皆さん、薔薇^{ばら}には必ず^{かならず}「棘^{とげ}や花^{はな}」がついているでしょう。日本^{にほん}には、「薔薇^{ばら}」に関して「美しい薔薇^{ばら}には、棘^{とげ}がある」と言う様な、ことわざがありますね。それは、「人は、いくら良い人であっても、自分^{ぶん}の中に、悪いこととかマイナスの点^{てん}があるだろう」という意味です。しかし、その諺^{ことわざ}を言い換えてみると、「棘^{とげ}のある薔薇^{ばら}も、美しい花^{はな}を咲かせる」というふうになります。

よく考えてみると、この二つの言い方は、言葉^{ことば}がほんの少し入れ替わるだけですが、ニュアンスが全く違うと思います。つまり、「美しい薔薇^{ばら}にも棘^{とげ}がある」と言えば、「相手のプラスの面^{めん}である人格^{じん}的な美しさ^み」(きれいなバラの花^{はな})を見るよりも、相手^{あいて}の中^{なか}にあるマイナスの面^{めん}である薔薇^{ばら}の棘^{とげ}の方が気^きになり、見つけ出す^み」ということです。

けれども、その逆^{ぎやく}に、「棘^{とげ}のある薔薇^{ばら}も、美しい花^{はな}を咲かせる」と言うと、「相手^{あいて}の中^{なか}にあるマイナスの面^{めん}である棘^{とげ}を気にするよりも、相手^{あいて}の中^{なか}のプラスの面^{めん}であるバラの花^{はな}の方^{ほう}を積極的に見つけ出す^み」ということになるのです。このような気持ちや前向きな思考^{しこう}をいつも身に付ければ、お互い^{たが}の信頼^{しん}関係を深めることができるでしょう。しかも、自分^{ぶん}と相手^{あいて}の間^{あいだ}に壁^{かべ}があるとしても、お互い^{たが}に赦^{ゆる}し合う事^{こと}によって、すべてを乗り越えられる^{おも}と思います。しかし、「花^{はな}」より「棘^{とげ}」の方が気^きになると、例えば、ちょっとだけの問題^{もんだい}でも、なかなか乗り越えられない^{おも}だろうと思います。

この「棘^{とげ}」と「花^{はな}」という話^{はなし}に関連^{かんれん}して、聖書^{せいしょ}の中で一番^{いちばん}分かりやすいところは、放蕩^{ほうとう}息子^{むすこ}の出来事^{できごと}(ルカ福音書^{ふくいんしょ}5:11~32)の中^{なか}にあると思います。特に、回心^{かいしん}して家^{いえ}に戻^{もど}って来た放蕩^{ほうとう}息子^{むすこ}の姿^{すがた}を見た^み、父親^{ちちおや}と兄^{あに}息子^{むすこ}の反応^{はんのう}の場面^{ばめん}です。よく考えてみると、結局^{けっきょく}問題^{もんだい}点は、相手^{あいて}すなわち放蕩^{ほうとう}息子^{むすこ}の中^{なか}にある、「棘^{とげ}」と「花^{はな}」を見ること^みによって分^わかります。つまり、兄^{あに}が、回心^{かいしん}して戻^{もど}って来た自分^{おとうと}の弟^{あに}を、受け入れなかつた理由^{りゆう}は、弟^{あに}の中^{なか}にある「花^{はな}」という「回心^{かいしん}した姿^{すがた}」を見るよりも、弟^{あに}の中^{なか}にある「棘^{とげ}」という「人生^{じんせい}の失敗^{しっばい}」しか見なかつたからです。その反対^{はんたい}に、父親^{ちちおや}は、息子^{むすこ}の中^{なか}にある「棘^{とげ}」という「人生^{じんせい}の失敗^{しっばい}」よりも、息子^{むすこ}の中^{なか}にある「花^{はな}」という「回心^{かいしん}した姿^{すがた}」を見たから、温^{あたた}かく受け入れたのです。とにかく、同じ問題^{もんだい}に直面^{ちよくめん}するのですが、どう向き合うのかということによって、結果^{けっか}が違^{ちが}ってくると思います。

マザー・テレサはこう言^いっていました:「どんな人^{ひと}であっても、まず、その人^{ひと}の中^{なか}にある、美しいもの^{うつく}を見るようにしています。この人^{ひと}の中^{なか}で、一番^{いちばん}素晴らしいものはなんだろう?そこからはじめようとしております。そうしますと、必ず^{かならず}美しいところ^{うつく}が見つ^みかって、そうすると私^{わたし}は、その人^{ひと}を愛^{あい}することができるようになって、それが愛^{あい}の始まり^{はじ}となります。」

聖書^{せいしょ}のある場面^{ばめん}で、イエス様^{さま}はペトロ^{ななかい}に「七回^{なな}どころか、七^{なな}の七十倍^{ななじゅうばい}までも赦^{ゆる}しなさい」と言^いいました。もちろん、それは、イエス様^{さま}は具体的^{ぐたいてき}に7×70の「490回^{かい}まで、赦^{ゆる}しなさい」とおっしゃっている

のではないのです。ユダヤでは7は神聖な数字で神を表し、その「7回」といえばほぼ「永遠」を指しています。さらに、その70倍なのです。もはや「超無限」に他人を赦しなさいという教えです。

皆さん、きょうのイエス様のみ言葉を身に付けましょう。特に、これからの人間関係において、心をこめて互いに赦し合うことができますように。そして、何よりも、まず、互いに心の中にある「邪魔な棘」を抜き、「美しい花」を見つけましょう。アーメン。